

一九〇〇年対中国出兵における連合海軍の共同行動

——ロシア国立海軍文書館史料より——

セルゲイ・チエルニャフスキー

ロシアの軍事史研究においては、二〇世紀は、露日戦争（一九〇四—一九〇五）をもって始まるとするのが通説となっている。この戦争は確実に両国の歴史の転換点となった。この戦争については、極めて詳細にかつ、あらゆる面から研究がなされ、数多くの研究論文、刊行物、本格的な著作が出されている。

これに比してあまり知られていないのが、一九〇〇年から一九〇一年にかけての中国への出兵で、その規模ともたらした結果にも関わらず、「戦争」と称されることすらない。この出兵については、一連の理由によりほとんど研究されることもなく、他の、より規模の大きい悲劇的な出来事の陰に押しやられたまま、実際に国民の記憶に残ることもなかった。両世紀の境目にあつて、まさにこの中国出兵はロシアにとって最初の、しかも勝利をもたらした戦争となったにも拘わらずである。

ロシアはこの戦争で、他国の領土を奪取する、あるいは中国の支配体制を覆すことを目的にはしていなかった。満州の中国軍は、先行して、ロシアの軍隊に対して戦闘行動をとった。事態は武力衝突にまで発展し、このことにより、双方は、両国の相互関係の中で蓄積していた問題を解決せざるを得なくなった。

中国におけるこの戦争は、政治的観点から見れば、きわめて複雑で矛盾に充ちた現象であった。これに一義的な評価を与えるほど、事は簡単

ではない。一つだけ確実に言えることは、この戦争は、我が国にきわめて深刻な結果をもたらしたという意味で、ロシアの歴史における重要な出来事となった、ということである。

特筆すべきことは、一部の戦場で、ロシアは、他の列強の軍隊と共同して戦闘行動を展開したことである。この戦争における我が国の連合国の一つとなったのが日本であったが、それからわずか四年後、同じ中国の領土内で、ロシアは日本との闘いに突入した。日本とロシアの他に、中国での軍事行動に参加したのは、フランス、ドイツ、アメリカ、イギリス、イタリア、およびオーストリア・ハンガリーであった。参加国の各々の目的と問題意識は異なり、しばしば相容れないものであった。それだけに、連合国間の相互関係はいかに形成されていったのか、どのように相互作用が実現されていき、その中でいかなる結果に到達することができたのかを分析することは興味深い。ロシア国立海軍文書館のフォンドには、中国での軍事衝突における、連合国艦隊の戦闘行動に関するきわめて興味深い史料が相当数保存されており、これらの史料は、上記の問題すべてに光を当ててくれる。

この戦争の前史を簡単に述べると次のようなものである。一九世紀の初め、外国の中国への活発な進出が始まった。伝統的な中国の閉鎖性も、明治維新の時の日本がそうであったような「自強政策」も、外国の侵入

から中国が身を守る助けにはならなかった。アメリカ、西欧諸国、日本との一連の条約締結の結果、中国は、実質的に、独立した外交政策を進める可能性を失った。

外国勢力の進出は、特に、経済的変化が失業の急激な増大を招いた中国北部地域において、住民の否定的反応を呼び起こした。状況に拍車をかけたのが、数年にわたって続いていた大飢饉と危険な疫病の蔓延で、それらは、無学な民衆には、外国人の出現の結果と受け取られたのであった。

一八九四年に日清戦争が勃発し、これにより、同地域の脆弱ながらもあった安定性は破壊され、文字通り、国際矛盾の中心地と化した。この背景の中で、極東におけるロシアの勢力増強が始まり、ほどなくロシアも中国問題で身動きがとれなくなったのである。

このような状況の中で、中国では、「外圧」との闘いを目的とする武装勢力の数が自然発生的に増加していった。中でも最も広汎な勢力となったのが「義和団」（「正義と和のための拳」）で、抵抗運動全体に自分たちの名前を残した。この運動の参加者たちは、拳闘に似た肉体訓練を行ったこと、さらに「正義と和のための拳」という名称から、欧米では「ボクサー、拳闘家」と呼ばれるようになった。蜂起者たちの共通の目的は、外国人を国内から追放することであったが、一部のグループは支配王朝である清の打倒をも目指していた。

自然発生的な民衆運動の例にもれず、一八九八年に最高潮に達した義和団蜂起は、強奪と迫害行為を引き起こした。外国人、特にキリスト教徒に対する攻撃と殺害は、日常的現象となった。この状況は、蜂起の指導者たちが、清朝政府との合意に従い、反政府スローガンを下ろし、「中国からの外国人駆逐」を主要課題として掲げたことから更に激化した。

事態が一段と切迫したのは一九〇〇年の春である。中国北部で、蜂起者たちは、ロシア正教会の学校と寺院を焼き払った。奉天では、外国人および中国人キリスト教徒の殺害が相次いだ。他の都市でも放火や集団殺戮が始まった。このような状況下で残された最後の選択は、もはや武力介入しかなく、ロシアは中国に駐留する自国軍隊の増強を始めた。一九〇〇年五月には海軍も導入する事態となった。関東州の司令長官であるE・I・アレクセエフ海軍中将は、海軍大臣A・N・クロパトキン陸軍大将に次のような報告をした。「北京の騷擾状態に鑑み、公使の要請に応じて海軍陸戦隊の派遣が不可欠と思われる。」¹⁾

一九〇〇年五月、列国連合軍は渤海湾に大艦隊を派遣した。時を置かず、海軍少将M・G・ヴェセルイ指揮下のロシア艦船部隊が大沽口に到着し、六月の初めには、海軍大将J・A・ギリテルブランドを司令官とする太平洋艦隊が、ほとんどすべて、個々に集結した。

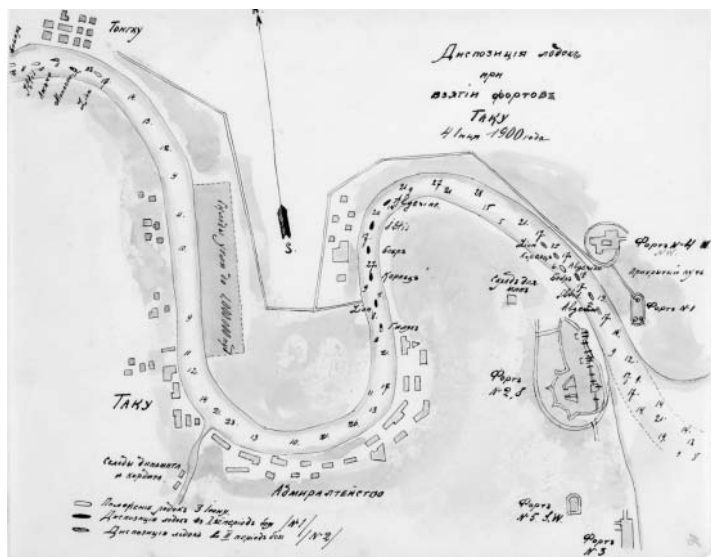
ロシア海軍が連諸国と共同して行った一九〇〇年の最初の出兵作戦は、外交団を含めて、外国人市民の生命が実際に脅かされていた北京への海軍陸戦隊の派遣であった。

ラデン大尉とフォン・デン少尉の指揮する陸戦隊は、装甲艦シソイ・ベリーキイ号とナヴリン号の水兵と士官七四名からなっていた。

ロシア隊は、およそ四五〇名からなる列国連合部隊に合流した。連合部隊は外国の代表部が置かれている大使館地区の防備に当たった。

連合軍と義和団の最初の衝突が生じたのは北京で、五月の終わりであった。六月の初めには外国大使館の包囲が始まった。蜂起者に政府軍が加わり、後者の手により、六月一日、日本大使館の参事官スギヤマ【書記生・杉山彬】が命を落とした。

義和団と中国軍による外国大使館包囲は二ヶ月にわたり、六月末までは列国部隊は実質的に毎日死傷者を出し、人的損害を蒙った。八月に入っ



1900年6月4日大沽砲台奪取時の連合国軍艦船等布陣図

てようやく海軍陸戦隊が自艦に戻り、代わりに陸軍部隊が駐屯することになった。

連合国上陸部隊の北京への派遣は、直隸省、とりわけ海から首都北京に向かう途上に位置する天津における状況の好転にはつながらなかった。蜂起者たちは政府軍が黙認する中、キリスト教徒、外国人市民を殺害し、鉄道を破壊した。北京の状況も好転にはほど遠かった。五月二十七日、イギリスの装甲艦ツェントウリオン号【英語名Centurion】の艦上で、列国連合艦隊の指導部による会議が行われ、イギリスのシーモア海軍中将

の提案により、北京への派兵準備をすることが決定された。ロシアは、ポルト・アルトゥール【旅順】からの陸軍部隊の到着を待つことを提案し、直ちに派兵準備に入ることに反対した。結果としてロシアの参加は海軍陸戦隊に限定された。

日本も加わっての列国編成部隊の規模は六〇〇名を下らず、その中には大砲二基を装備したロシア海軍軍人一三五名が含まれていた。五月二十七日、編成部隊は列車に乗り込み、北京方面に向かった。少し遅れて増援部隊が後に続いた。八カ国の陸戦兵からなるシーモアの派兵部隊は、合計二〇〇四名に及び、その中には、I・I・I・チャギン海軍中佐(元駐日ロシア海軍武官)指揮下のロシア水兵三一二名と将校七名が含まれていた。日本の部隊は将校二名と兵卒五四名からなっていた。

当初、部隊の移動は、順調に流血事もなく進んだ。義和団との最初の戦闘が起こったのは六月一日で、六月五日には、大沽砲台奪取後、列国部隊は中国政府軍の攻撃を受けた。二時間にわたる戦闘で陸戦兵五〇名以上と中国人数百名が死亡した。ほどなく、シーモアは北京に向けての前進を断念せざるを得なくなり、後退に転じたが、それでもロシア海軍軍人を含む人的損害を蒙った。独力で天津に戻ることが出来なくなったシーモアは、シグの中国武器庫を奪取し、援軍が来るまで防備を固めた。

包囲された部隊が脱出に成功したのは、ロシアと連合国の部隊から成るシリンスキー陸軍中佐の編成部隊が到着した六月一二日になってからのことであった。この遠征の人的損失は死者六二名、負傷者二五二名におよび、そのうちロシア側の死者は水兵一〇名、負傷者は将校四名、兵卒二一名、挫傷者一〇名であった。日本側の人的損失は、死者は兵卒二名、負傷者は兵卒三名であった。海軍中佐チャギンは、シーモア海軍中將の遠征へのロシア海軍軍人の参加に関する報告の中で、次のように記している。「…我が部隊の将校、及び、指揮官等の行動は、ともに非の

打ち所のないものであった、；我々の行軍の四日間にわたる銃弾と砲弾の嵐の中で、彼らは賞賛に値する堅忍と高い規律を身をもって示した」⁽⁴⁾。

一九〇〇年の出兵時、特に大きな意味を持っていたのは天津の防備で、そこでの決定的な役割を果たしたのはロシアの軍隊であった。五月末、蜂起者たちは天津市内に入り、キリスト教徒を残酷に処刑し、教会を焼き払い、鉄道の駅と外国人租界を包囲した。シーモアの部隊が退却した後には、外国軍隊は実質上残っていないかった。義和団にとり、すべての外国人を一掃し、町とその周辺を完全な支配下に置く可能性が現実のものとなった。幸いなことに、五月三〇日にシベリア狙撃兵五個中隊が市内に入った。

一週間にわたり、カウリバルス海軍大尉の指揮する海軍軍人四四名を含むロシア軍は、市街地のヨーロッパ租界を防御した。戦闘は激しいものとなり、義和団側が並々ならぬ頑強さを示したことから、情勢は危機的であった。防御側の人的損害は二〇〇名を超え、大沽砲台奪取後、外国軍隊、コサック・ロシア狙撃兵の部隊が、包囲されているロシア軍の支援に到着したことで、情勢に変化がもたらされた。

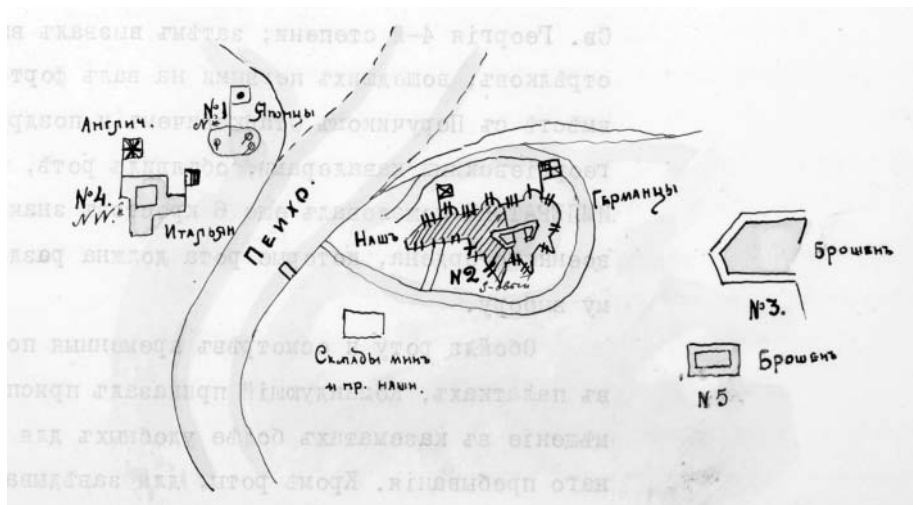
天津攻防戦は、更に一ヶ月近く続いたが、その主力をなしたのは陸軍部隊で、海軍部隊ではなかった。

一九〇〇年の出兵における最大かつ主要作戦となったのは、大沽砲台の奪取で、その遂行は、陸海軍の共同で行われた。作戦を成功に導くためには、天津、北京に向かう経路の起点である白河河口を完全に制圧することが不可欠であった。このことは、外国軍隊の首都入京を中国政府が禁止した段階で、特に、明白なものとなった。太平洋における海軍の司令長官であるE・I・アレクセエフは太平洋艦隊司令官J・a・P・ギリテルバント海軍中将に、白河への入口を支配している大沽要塞を連合国と共同で占領するよう提言した。一九〇〇年六月二日付の電信(第二

三一号)には、次のことが述べられている。「大沽砲台の防御、機雷による防御線構築、さらに、大沽―天津間の鉄道占拠のための軍隊集結に関し、作戦強化の報告を、ヴォガク(中国駐在ロシア武官。チエルニャフスキー注)から受領。危機的状況を考慮するならば、大沽を他【国】の将官と共同して占領することが不可欠と思惟。さもなくば、艦隊と大沽・天津間の連絡網を失う結果となり、我が国の陸戦部隊と陸軍部隊は絶望的な状況に陥る」⁽⁵⁾。

六月三日午前中、巡洋艦ロシア号の艦上で、連合国の艦隊司令官による定例会議が行われた。会議では、次のように、中国に最後通牒を突きつけることが、全員一致で決定された。「貴国が」無秩序状態に陥ったことから、連合列強は、外交団下の自国民保護のために、部隊を順調に上陸させた。一方これと時期を同じくして、貴帝政府の代表者は、自らの責務を理解し、秩序回復のための然るべき方策を講じたことと推察する。しかし現在では、公然と外国人への共感を示し、鉄道路線に軍隊を集結させ、また、機雷をもって白河への入り口を塞いでいる。この一連の行動は、貴政府が外国人に対する厳かな責任を忘却していることを明示している。列国連合軍の各司令官は、陸上の自己の部隊との恒常的な連絡を保持する義務があることから、善意、あるいは、武力でもって一時的に大沽要塞を占領することを決議した。要塞を連合国軍に引き渡す最終期限は、四日(十七日)午前二時までとする。この決議は、天津にいる副総督と要塞司令官にも同時に伝えられるであろう」⁽⁶⁾。

最後通牒は、アメリカを除いて、すべての国の司令官によって署名された。アメリカの司令官は合議には出席しなかった。というのは、彼の言によれば、自国政府から「中国人が直接アメリカ政府に対して敵対行為をしない限りは、中立を守る」よう指示を受けていたからである。作戦の総指揮は、砲艦ポーブル号の艦長A・N・ドロヴォリスキー海軍



白河作戦英独露伊日連合軍砲台奪取後布陣図
(前図右部分と同一地)

大佐に委任された。

水雷艇二〇七号の艦長バフメチエフ海軍大尉は最後通牒を大沽要塞司令官ロ・ユングアン【羅榮光】に手渡した。シラムチエンコ海軍少尉は

直隸省総督ユイ・ル【祐祿】に最後通牒を手渡すために天津に赴いた。連合艦隊の戦艦は、海岸から十二マイル離れた投錨地に停泊していた。白河は水深が浅いため、使用できるのは巡洋艇と喫水線の浅い船に限られた。

巡洋艦アドミラル・コルニーロフ号から第十二東シベリア狙撃連隊の中隊が上陸した。この間連合国もそれぞれ自国の陸戦隊の上陸を完了した。夕刻までに塘沽駅地区に集結したのは、ロシア人一八四名、日本人三二九名、イギリス人二五〇名、ドイツ人十四名の九〇三名であった。⁽⁸⁾

ドプロヴォリスキー海軍大佐は、海軍大将から最後通牒と指示書を受け取ると直ちに、白河に停泊している全艦船の艦長を招集し、軍事会議を開いた。該当艦船は、ロシアの水雷艇二〇四号と同二〇七号、砲艦ポール号、コレエツ号、ギリヤーク号以外には、イギリスの砲艦アルジェリン号、フランスの砲艦リオン号、ドイツの砲艦イルティス号、およびイギリスの駆逐艦フェイム号とワイティング号であった。

日本の軍艦赤城の艦長は機関故障のため、砲台強襲への参加を断念した。アメリカの外輪蒸気艦モネクシーの艦長も同様の決定を下したが、中立遵守がその理由ではなかった。

砲台攻撃隊に任命されたのは、第十二東シベリア狙撃連隊混成中隊の一六三名、イギリス人一六〇名、ドイツ人一四〇名、日本人二二二名で、装備は陸戦用武器三挺であった。それ以外の者は鉄道駅の警備を命ぜられた。

連合国軍を迎え撃ったのは四基の砲台であった、河の右岸の「南」砲台と「新」砲台、左岸の「北」砲台と「北西」砲台で計一七〇、一部の史料によれば二四〇の砲架を装備しており、その一部は当時としては最新のシステムのものであった。連合国側の艦船が装備している砲は全部で四七基、大口径のものはロシア艦船にある一五三ミリから二二九ミリ

の五基のみで、他は七五ミリ砲以下のものであった。

砲台守備隊は、三、五〇〇名以上の兵士と将校から成り、ヨーロッパ式の訓練を受けた者たちだった。その他に、大沽地区には十三の戦艦を含む中国艦隊が停泊し、ほど遠くないところに、ヨーロッパ人の教官によって装備・訓練されたニエ・シチエン【聶士成】陸軍大将の部隊が駐屯していた。

二三時〇〇分には中国の戦艦と陸軍部隊がそれぞれの配置に就き、六月四日〇時五〇分に「北西」砲台から最初の一発が鳴り響いた。砲撃戦は数時間続いたが、敵方の砲撃が優勢で、ロシアの砲艦は他の艦船と同様に重大な損害を受けた。アメリカの艦船モネクシー号も流れ弾を舷に受け、局外に留まっていることはできず、艦長は中立を放棄することを余儀なくさせられた。この砲撃戦の様子は、ロシア国立海軍文書館に保存されている史料に次のように記されている。

「：午前三時近く、船列の傍をドイツの小型船艇が通過、その艇長は、突撃部隊が第四号砲台への進攻を開始したと伝え、砲艦イルティス号に気球を掲げて砲台への艦砲射撃を停止するよう要請した。砲台に向かつて小走りに近づいていく狙撃兵の一隊が月明かりの中で識別できた、三時二〇分、敵の砲火で攻撃隊はいったん動きを止めたが、三時五五分、再び前進を始めた。

砲艦イルティス号上に気球が揚げられ、艦砲射撃は第三号砲台と南砲台に目標を移した。

四時四〇分、散兵線は砲台まで五〇〇歩ほどの距離に近づき地面に伏せ、そして日本の陸戦砲が火を吹いた。砲台防壁への砲撃が五分ばかり続いた後、再び進撃が開始され、四時五〇分攻撃隊は「ウラー」の叫び声を上げて突進した。ロシアの狙撃兵が先頭に立ち、イギリス兵がそれに並んだ。

砲台を取り囲んでいる水壕に達したところで、狙撃兵は、砲台沿いに右に回り河側にある門に向かった。壕に掛かっている橋を中国人は何故か破壊していなかったもので、突撃隊はその橋を渡って、内側から土嚢で塞いである門を打ち壊し始めた。この作業に精力的に参加したのは右翼にいた日本兵で、それに続き、傍にいたロシア兵もそれに加わった。門が明けられるやいなや先頭で中に突進したのは、部下である狙撃兵四名を従えたスタンケヴィチ陸軍中尉で、日本兵がそれに続いたが、彼らは否応なく、入り口に斜めに置かれた大砲からの榴霰弾の直撃を受けた。砲台守備隊は反撃することなく逃走した。

第四号砲台への攻撃が開始されると同時に、午前四時三五分に砲艦ポール号からの砲弾が第四号砲台で炸裂した。五時三〇分頃、艦砲射撃を浴び、ほぼ沈黙状態だった第一号砲台が突撃隊によって奪取された。第一号砲台の上に連合国の旗が上がるやいなや、艦船は次々に錨を揚げて河口付近に移動し、第四号砲台と第一号砲台の間の位置から、南側の砲台に縦射を浴びせた。

午前五時五二分、第二号砲台でほぼ同時に二回砲弾が炸裂した。そのうちの一発は強力なものであった。中国人は砲艦からの速射砲による攻撃に驚き、群をなして砲台から逃亡した。陸戦隊は船で対岸に運ばれ、敵の抵抗を受けることなく第二号砲台を占領した。引き続き六時二五分に第三号砲台での新たな砲弾炸裂があったが、それが最後であった。六時四五分、大沽のすべての砲台は連合国の手に落ちた⁽⁹⁾。

「：七時二〇分にドイツの巡洋艦ゲルト号から列国部隊の全艦船宛てに『砲台を奪取』との信号が送られた。それと同時に、同様の信号を掲げた水雷艇二〇七号が河から姿を現した⁽¹⁰⁾。九時三〇分、将官と艦長が第六回の会議のために巡洋艦ロシア号に集まった⁽¹⁰⁾」。

中国艦隊は戦闘に参加しなかった。中国の水雷艇が一隻河口から出ていくところで捕捉され、四隻は埠頭で乗組員によって放棄された。ニエ・シチェン【聶士成】陸軍大将の軍は砲台に接近したが、戦闘には参加せず退却した。海側から砲撃をしたのは中国の平船一隻のみで、これも直に撃沈された。

中国側の損失は甚大で、捕虜にするまでもなかった。大沽要塞の司令官ロ・ユングアン【羅榮光】は自決した。

攻撃が行われている間「：砲台には七、六三四発の砲弾と一八、一七四発の機関銃弾が撃ち込まれた。その結果、連合艦隊に砲撃を加えていた三三基の砲台のうち一〇基は爆破され、火薬・薬莖地下倉庫で大爆発が三回、小爆発が八回引き起こされ、砲台内部は相当に破壊された。

中国側が発射した砲弾の数は不明である。連合艦隊のうち特に被害を蒙ったのは、イルティス（十六発）、ギリヤーク（三発）、コレエツ（六発）、リオン（一発）、アルジェリン（二発）、ワイティンク（一発）の各艦であった⁽¹¹⁾。

人的損失については、以下の通りであった。

「：コレエツ号では、海軍大尉ブラコフが死亡、海軍大尉デネフが瀕死の重傷、兵卒の死亡者八名、負傷者二一名。ギリヤーク号では、海軍少佐チトフとボグダノフが負傷、兵卒の死亡者八名、負傷者四五名、自由雇いの料理人が負傷。リオン号では、兵卒三名が負傷（うち一名は瀕死の重傷）。イルティス号では、将校は一名死亡、一名負傷（艦長）、兵卒は四名死亡、瀕死の重傷二名、十二名が負傷。アルジェリン号では、将校二名と兵卒七名が負傷。

突撃部隊では、第十二東シベリア狙撃連隊のうち兵卒瀕死の重傷一名、負傷一名、イギリス人のうち兵卒一名死亡、負傷六名、日本人は、将校一名が瀕死の重傷、兵卒二名が死亡、二名が瀕死の重傷、四名が負傷で

あった。

艦船と突撃部隊の死傷者は総計で、将校九名、兵卒一二九名である。中国側の人的損失を正確に明らかにすることは出来ない⁽¹²⁾。

皇帝陛下ニコライ二世は次のような電報を極東に送っている。「事の成就を祝すと共に、戦死者に対して哀悼の意を表す。負傷者への手当は万全であることを望む。ドプロヴォリスキー海軍大佐、コレエツ号、ギリヤーク号、ポーブル号の艦長ならびに将校に我が深謝を、艦船の勇敢なる兵卒一同に我が会心の謝意を伝えよ⁽¹³⁾」。

出兵の総括として、ロシア将校には勲章と銀製の武器が、また兵卒には軍事勲功章が、それぞれ贈られた。捕捉された中国の水雷艇には「ブラコフ少佐」という名称が冠せられ、戦利品の水雷艇は「タク【大沽】」と名付けられた。

中国での戦闘活動で功績のあった連合艦隊の将校と兵卒も特別な褒賞を受けた。太平洋艦隊司令官ギリテルブランド海軍中将は、アレクセフ海軍中将宛、一九〇〇年七月二二日付書簡の中で次のように記している。「先日、私のところにクルジヨル海軍大将（フランス艦隊司令官。チェルニャフスキー注）が来て、次の提案をした。それは、様々な国の海軍陸戦部隊と陸軍部隊が、海岸で共に作戦に当たったことを考慮するならば、共同行動における勲功に対し、最も優れた各国士官を叙勲に推挙することは正当であると思う、というものであった。この考えを実行するためにクルジヨル海軍大将は、私に、次のような提案内容の回状をすべての関係国の将官・士官に回してほしいと要請した。その提案とい

うのは、今回のような協力関係の確立を自国政府に願い出ること、このような共同行動は、上記のような条件下では、嫉妬も不満も引き起こすことなく、行動軍相互の協力を大きく確立することに寄与するものである⁽¹⁴⁾」。



ロシア勲章推挙者名簿

これを受けてロシア軍司令部が働きかけた結果、連合艦隊の相当数の海軍軍人をロシアの勲章に推挙することとなった。推挙された者の中には日本艦隊の将校も含まれていた。一九〇〇年一月一日付の「对中国共同作戦行動参加の功績に対して褒賞に推挙された日本艦隊将校の名簿」には七五名が記載されていて、その中には、艦隊司令官東郷海軍中将、艦隊副司令官出羽海軍少将が含まれていて、両者とも四年後に露日戦争に参加し英雄となった。⁽¹⁵⁾その他に、營口の軍事警備司令官K・K・クラビエ・ド・コロング海軍中佐からの誓願で、在營口日本総領事【在牛莊領事。挿図では營口と記載。】田辺熊三郎 (Kumasaburo Tanabe) が聖スタニスラフ三級勲章に推挙された。⁽¹⁶⁾

なお、一九〇〇年の出兵において、ロシア艦隊は連合国と共同し、山海関と營口の占領に参加した。満州を軍事行動の舞台とした戦闘におい

てロシアは単独で行動した。満州を自分の特殊権益地帯と見なしていたからである。

おしなべて、ロシア艦隊と連合国は、果たすべき任務をすべて遂行し、出兵に関して十分な成果をあげた。否定的側面は、海上に強力な敵が存在しなかったために、有益な戦闘体験を得る機会がなかったことで、このことは露日戦争におけるロシア艦隊の作戦に負の影響を与えた。中国のような潜在的な強敵に勝利を収めたことが、別の敵、日本を過小評価した原因の一つとなった。とはいえ、中国への出兵は、ロシア艦隊および日本を含めた連合艦隊の歴史における顕著かつ重要な一頁となった。

【 】は翻訳者の注。

【註】

- (1) Материалы для описания военных действий в Китае в 1900-1901 гг. Отдел III. Книга I-я. С. 4
- (2) РГАВМФ. Ф. 467. Оп. 1. Д. 64. Л. 10.
- (3) РГАВМФ. Ф. 417. Оп. 1. Д. 2227. Л. 904.
- (4) РГАВМФ. Ф. 417. Оп. 1. Д. 2263. Л. 384.
- (5) РГАВМФ. Ф. 467. Оп. 1. Д. 64. Л. 96.
- (6) РГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 5753. Л. 10, 11.
- (7) РГАВМФ. Ф. 315. Оп. 1. Д. 1616. Л. 32.
- (8) РГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 5753. Л. 12.
- (9) РГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 5753. Л. 15, 16.
- (10) РГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 5753. Л. 17.
- (11) РГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 5753. Л. 19.
- (12) РГАВМФ. Ф. 315. Оп. 1. Д. 1616. Л. 39.
- (13) Дневенский Д. Г. У стен недвижного Китая. Дневник корреспондента «Нового Края» на театре военных действий в Китае в 1900 году. СПб., П-Артур, 1903. С. 186.

- (14) PTABMΦ. Φ. 467. On. 1. J. 45. JI. 3.
- (15) PTABMΦ. Φ. 467. On. 1. J. 45. JJI. 63-68.
- (16) PTABMΦ. Φ. 467. On. 1. J. 45. JJI. 83, 84.

(翻訳：有泉和子)

本研究集会は、科学研究費補助金基盤研究A「東アジアの国際環境と中国・ロシア所在日本関係史料の総合的研究」(課題番号19202020)、研究代表者：保谷 徹)の一環として、その経費の一部も使用して行なった。